

大山と芥子粒

蒜山インターを米子方面に過ぎるころ、正面に伏せつた大きな牛の背のような稜線が見える。これが三平山である。ここ数年、私はこの山に四季を通して何回も登っている。雪深い時期でもほぼ一時間で登ることができ、蒜山三座から烏ヶ山、また大山から弓ヶ浜まで眺望できるからである。残雪の隙間にフキノトウを見る季節も良い。カラマツが紅葉しサラサラと落葉するころも良い。しかし晴れた冬の日に、新雪を踏みしめながら登って眺める大山の姿はまた格別である。

「怒りや憎しみにしがみついているとき、人は自分が囚われの身であることに気づかない」『許すということ』ジャンボルスキー著 大内博訳

これは、最近私の心をとらえた言葉の一つだ。この本を読みながら私は、志賀直哉の小説『暗夜行路』の「大山にて」の一節を思い出していた。

主人公の健作は、自分が祖父と母との間に生まれた不義の子である事実を知るが、その上、妻が従兄弟と過ちを犯したことで分かる。彼は大山の宿坊で静養するが、信ずべき人を憎む苦痛は、腸が捻じれるほどのものであったらうと推察できる。彼は、ある日の夜明け前、提灯をかざす案内人の先導で山頂をめざすが、食当たりのせいのか激しい腹痛に悩まされる。そのため、六合目付近の草むらで一同と離れ、一人で夜明けを待つことになる。このときの彼の心と大山の自然を著者は次のように描く。

「疲れ切ってはいるが、それが不思議な陶酔感となつて感じられた。彼は自分の精神も肉体も、今、この大きな自然の中に溶け込んでいくのを感じた。その自然というのは芥子粒ほどに小さい彼を無限の大きさに包んでいく気体のような、目を感じられないものであるが、その中に溶けていく、一言葉に表現できないほどの快さであった」：朝を迎え、やつとの思いで宿坊に戻った彼は重症の大腸カタルに罹っていたことを知るが、電報でそれを知り京都からかけつけた妻の眼には「見たことのない、柔らかな、そして愛情のある眼差し」健作であった。

怒りや憎しみにしがみつくのは、踏みにじつた者への「怒り」と、「復讐心」と、相手の存在そのものを「否認」したい感情などのゆえであろうか。しかし、それへのしがみつきは、エゴへの囚われであり、こだわればかりだわるほど、しがみつけばしがみつくほど自分を苦しめることになる。さらに「自分は悪くないのに、なぜ？」という疑問が、その苦しみの悪循環をいつそう促すことになる。

：しかし、小説では、祖父や母、妻を許せず、そのことで身悶える主人公が、大山の自然に抱かれ、自分を無限の大きさに包んでくれる気体の中の芥子粒のように感じるという不思議な体験をするのが描かれる。

許しが、苦しみから解放してくれることが分かっているとしても、それは努力してできることではない。いや、人間の力でできることではないときえ言うべきかもしれない。：しかし、「許さない」という、自らのその選択と決断が、この地獄からの脱出の道を閉ざしている事実からも、私たちは目をそらすべきではないだろう。

私は杖塾や学校の相談室で、「許さない」（許せない）苦しみと、いつも出会っている。そしてしばしば山に登り、志賀直哉が描いた「芥子粒ほど小さな自分を無限の大きさに包んでくれる自然」に会いに行く。小さな自分を実感したのは、大きなものに出会いたいがためである。私もまた囚われの身からの解放を望む存在であるから…。

